



英語教育開発センター 井狩 幸男

新入生の皆さん、ご入学おめでとございます。これからの大学生活が実り多いことを願っています。また、そのために伝えたいことがあります。在学中に、物事に対して、何故という疑問を持つ姿勢を身につけて欲しいと思います。文系、理系を問わず、「なぜそうなのか」と原理を追求する態度を修得することは、様々な事象を深く考えることにつながり、卒業後の人生をより有意義にする糧になります。

英語の学び方

ところで、私の専門は、神経心理言語学と呼ばれる分野です。現在、脳と言語の関係について研究しています。対象は、言語発達、言語障害、バイリンガリズム、英語教育等、多岐にわたります。今回、これまでの研究から得られた知見を基に、大学での英語の学びについてお話しします。

卒業までにある程度達成して欲しい目標を2つ挙げます。まず、ネイティブに通じる英語で書いたり、話したりできるようにすること。次に、英語を聞いたり、読んだりして、要点をまとめる力を身につけることです。前者に関して、直訳の影響で意味不明な英語になる例を見てみましょう。「ここは何処ですか」は、正しくはWhere am I?ですが、Where is

Un roseau

総合教育科目ガイドブック

No.20

タイトル“Un roseau(アン ロゾ)”
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623 - 1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると……
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・ブリユ・フェーブル・ドゥ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。

人間は水辺の一本の葦のようにはない存在ではあるのだが、
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。



生活科学研究科・教育改革担当特命副学長 永村 一雄

1. グローバル化と英語

いまの大学は、程度の差こそあれ、どこもかしこも学生に向けてグローバル化を叫んでいます。海外からの渡航者がかつてないほど増加していますし、梅田・難波あたりは、たしかに国外からの観光客をたくさん見かけます。自分の周囲に日本語ではないコトバを話す人たちがたくさん存在する、それが日常になりつつあるようです。くわえて、学生のみなさんが外資系の会社に就職したり、国内企業に入っても海外に赴任する機会が増えることでしょう。そのとき、どうやって仕事相手と意志の疎通をおこなうのか。フツーは誰が考えても「英語」です。なので(?)文科省も、入試制度を強引に替えてでも英語に4技能(聞く・読む・話す・書く)を求めているのだらうと邪推します。グローバル化にともなう必須のコミュニケーション・ツール、そのひとつが英語である、そんな感じですが。

ただし、英語で意思疎通と書きましたが、相手はなにも英語圏のヒトに限られていないことに注意してください。英語を母語にしていなくとも、共通のコトバとして英語を使っているにすぎません。そ

Net)と間違えることがあります。これは、言葉を分析的に捉えて、単語レベルで日本語と英語を一对一で対応させることに起因します。このことから、ネイティブに理解できる英語を身につけるためには、直読直解を心掛けることが重要です。後者については、細部にこだわらない姿勢を養うことと関係があります。しばしば中学や高校で見られる英語表現の細部へのこだわりは代わって、広い視野に立ち、大局的に眺める能力を修得することがより重要になります。ここに挙げた2つの目標は、ネイティブに通用する英語を習得するための必須条件です。

ここで少し話題を変えます。皆さんは、小学校高学年から英語に触れてきたと思います。小学校では、楽しく簡単に覚えられた英語が、中学に入ると急に難しく感じた人も少なくないでしょう。どうしてこうなるのでしょうか。私は、脳の働きと関係があると思っています。

中学に入ると、英語を使うよりも英語について説明を聞く機会が増えます。その時主に使うのは左脳です。左脳は分析処理に向いています。それに対して、右脳は、細かく分けずに固まりとして捉えることに適しています。つまり、情報処理に関わる主要な部位が右脳から左脳に移るために、難しく感じるようになると考えられます。

また、様々な対象を分析する際、意識を伴います。単語を覚えたり、文法に基づき文の意味を考える時のように分析的な作業をすると、意識は働きます。他方、友達と話をしている時、そのことを意識しません。なぜ、このような違いが生まれるのでしょうか。これを説明するには、小脳に注目する必要があります。小脳は

大脳と連携しながら、高速で言語処理を行います。意識するためには、ほんの少し時間がかかります。その時間より高速だと、意識する前に処理が完了します。その結果、話している言葉が意識に上ることはほとんどありません。

皆さんの中には、どうしても意識せずに英語が話せたり、書けたりするのを知りたい人がいると思います。そういう人にお勧めなのは、インプット(聞く、読む)よりも、アウトプット(話す、書く)に重点を置いた練習です。英語を学ぶ際に、頭で考え、分析することは、最初の内は避けられませんが、徐々に慣れると、考えなくても意味がとれるようになります。この時、脳では、言語処理の流れが、右脳 左脳から左脳 右脳へと変化し、同時に、大脳と小脳の連携が強くなると考えられます。

さて、あと2つ伝えたいことがあります。まず、英語で表現したり、理解する時は、できるだけ意味に集中してほしいということです。人と話をしている時、話の内容に注意が向きます。表現自体は、ほとんど気になりません。ところが、英語になると、往々にして意味と形式の関係が逆転します。同じ言葉でありながら、この接し方の違いは理に通っていません。平日頃から、文法のことをあまり気にせずに、意味に注意が向くよう、繰り返し話したり、書いたりすることが大事です。

2つ目は、英語を聞いたり、読んだりする時に、前もって、内容に関する情報を集めるよう習慣づけることです。意味を理解する際、脳内では、関連情報を立ち上げて準備をしているからです。このことに関連して、大学時代のゼミの恩師の河野守夫先生は、リスニングは、

のために、英語で聞き、英語を読んで、話し、書くことができることを、社会は求めている、らしいのです。

さて、このような状況下で、大学であえて英語を学ぶとしたら、どのような内容がふさわしいのでしょうか。社会の要請に応えて、実用の英語を基本に据えるのかあるいは、大学で教養の真髄を身につけるべく英語を学ぶのか。学生である時間は限られています。そのなかで、英語に割く時間は短いのですから、とても悩ましい課題です。

学生の側も、要求すべき中身が何であるべきか、意見は割れそうに思いますし、大学の各学部ですら、身につけてほしい内容・レベルはさまざまです。自分が入学した学部のポリシーで、いまいちど、この点を確認し、英語の学習に向き合ってもらえないでしょうか。

2. 英語が苦手なあなたへ

そうはいつても、英語は苦手というヒトもいるでしょう。とにかくコトバですら、ホントなら、英語圏で暮せたいとい話せるようになるし、聞きとれるようにもなるはず。理屈でわかっていても、なに、できない。そんなあなたに、AI仕立ての道具を使ったコミュニケーション、考えてみてはいかが？ いまなら、2万円も出せば、74ヶ国語を瞬時に通訳し、日常会話に齟齬を来さないガジェットも登場しています。グローバルって、要は、相手を理解し、こちらの考えをわかかってもらう作業のはず。だとしたら、自身の考えを相手にわかりやすく、論理的に説明できることこそ大事なのは、そのためには、文章の構成がシンプルで筋の通

った組み立てでなければなりません。もちろん、相手を引きつける魅力も必要になるでしょう。英語への翻訳は先のガジェットに任せるとして、伝えたい中身がしっかりしているかは、あなた自身の国語力に依存します。

RST(Reading Skill Test)というワードをご存知でしょうか？ 自分がちゃんと文章を理解して読めているかを測るテストのことで、小中学校の生徒は、意外と教科書を適切に読めていないことがわかってきています。みなさんがそうだとはいませんが、もし文章力に自信がないのであれば、「文章力向上セミナー」を受講してみてもいかがでしょうか。本学では、こうした基本を確実にものにする科目も、教育課程に適宜配置していますので、シラバスを読んで履修計画を組み立ててみてください。

3. AIとこれからの学修

ところで、ここ数年、AIというコトバと、それを使ったガジェットが世間を騒がせてきました。さきほど述べた「通訳ガジェット」もそのひとつです。チェスはもとより、将棋や囲碁の世界でも、AIはヒトを超えてしまいました。中堅大学なら入学も可能と言われた「東口ポーク」も、考えてみてはいかが？ ひょっとして、この先少々の知識をつけたくらいではAIに負けてしまい、職を失ってしまうのではないかと、漠然と不安をもつヒトも増えていきます。

これまでの社会では、大学でなにがしか資格や技術を身につけ、それを資本に自分の生計を担おうと人生設計してきましたが、これからは、獲得した知識だけ

単に耳に入ってくる音を脳内で処理しているのではなく、予測しながら聞いていると、よく言われていました。私が大学2年の時で、40年以上前のことです。聴解処理に予測が関わっていることは、今ではよく知られていますが、当時そのことを見抜かれていたのは驚くべきことです。先生との出会いが、人と言語の関係に関する研究に対して、私の好奇心の扉を開けてくれました。

未来へ

それから現在に至るまで、人と言語の関わりについて、ずっと興味を持ち続け、自分の専門領域を、英語学から心理言語学を経て、神経心理言語学に広げて来ました。これまでの研究を支えてきたのは、自明と思われることに疑問を抱きながら、新たな答えを見つけようとするこだわりでした。振り返ると、その道筋は間違っていないかったと感じますが、30代、40代の頃は不安もありました。皆さんは、これから人生や将来のことで悩むことがあると思います。そんな時、自分にふさわしい場所がきつと見つかると思っていて頑張ってください。

学生時代

最後に、学生時代のことを書きます。皆さんの学生生活の参考になれば幸いです。中学でサッカー、高校でハンドボールと体育会系に所属した私が、一浪して入った大学は、市大の文学部のように男性と女性の割合が大体一対四で、ほとんどの運動部で男子部員が不足している有り様でした。そこで、偶然勧誘された混声合唱団に入学し、最初はどうなることかと心配した部活も、住めば都になりました。

冬の定期演奏会、甲南大学、神戸女学院大学との夏の合同演奏会、岡山大学とのジョイントコンサート、神戸大学の学生だけの第九のオケと合唱に参加等、充実した日々を過ごしました。部活の他にも2年と3年の時に、シエークスピアが好きなアメリカ人の先生の下で、「トロイラスとクレシダ」「ペリクリーズ」に挑戦。一人で何役もこなす、必至で台詞を覚えたいことがありました。また、3年の時に既存のゼミに満足できず、同じ思いを抱く仲間と一緒に恩師にお願いし、新たなゼミを立ち上げました。また、夏休みになると、ICU幼児言語学研究会や、白馬夏季言語学研究会に参加して、自分に興味のある分野を模索しました。そして3年の春休みから4年の4月にかけて、ゼミの恩師とメキシコで開かれたTESOLの国際会議に参加し、その後、バックパックを背負い、飛行機とバスで全米を1ヶ月かけて一人で回りました。4月末に帰国し、5月の連休明けに授業に出た時は、流石に先生方に呆れられました。何かが無事に卒業できました。

井狩 幸男(いかりゆきお)

1955年生まれ

神戸市外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(英語学専攻)修士(文学)
現在、英語教育開発センター 教授
専攻分野/神経心理言語学

全学共通教育の担当科目/College English

VI

では不足で、会社に入った後もつぎつぎと新しい学びにチャレンジしていく姿勢を保つことが求められそうです。だって、単なる記憶や少しばかりの応用なら、AIで十分のこと足りるのですから。AIに使われるのではなく、AIを使って仕事に立ち向かうには、いまから、対策をはじめないといけません。

とはいっても、その対策、フツの勉強の基本と同じであることに気づいてください。なぜって、いまのところAIは、ヒトのように、「物事の理解」はできないからです。逆に言えば、「物事の理解」はヒトにしかできない特技のようです。手順や方法が明示され、それがアルゴリズムに書き換えられて、作業をこなす様は、あなたも仕事の中身をキカイが理解しているように見えますが、それはあくまで、ヒトが敷いた線路の上をキカイが走っているに過ぎません。AIを活気づかせた話題のデイブ・ラーニングですら、理解という概念を内包することは、なまなかでないようです。

記憶だけでなく、理解そのものに比重をおいた学修が、いまこそ求められている。そういう時代になったと感じます。大学が提供する講義にしても、理解を重視する内容に変えていくことが求められているのです。教員も、この意味で、講義のあり方を練り直す必要に迫られています。できれば、ともに講義のあり方を探っていただけたらと思っています。

4. わからないことがあったなら...

OCUラーニングセンター(学修支援推進室)という窓口があることを知っていますか? 全学共通教育棟の一階にあ

ります。学習ことによる相談といえはよいでしょうか。科目では、主に英語と数学に限っていますが、学生生活全般についても相談にのってくれる窓口が、大学には設けられています。気軽に相談にのってくださいから、心配事があるのなら、窓口まで行ってみてはいかがでしょうか。いざというとき、いっしょに解決してくれる仲間の存在は貴重です。レポートの書き方や定期試験への対策など、支援センターで随時セミナーが開催されていますから、ぜひご参加ください。

それでは、これからのたのしい学生生活を、こころゆくまで堪能してください。

この欄の執筆依頼を受けて、書くべき中身をどうしようか随分迷いました。新人生への伝言がまだそうで、たしかにこれまでの方々の稿^{*)}は、とても含蓄に満ちた内容でしたし、どれも腑に落ちるものばかりです。わたしが書いたことは、どちらかというと、大学の教員としては、やや異質な話かもしれませんが、なぜって、品行方正じゃないから、でもワザとそう書いたのではありません。ホントに実感してるから、です。

^{*)}過去の記事は、

<http://www.rheosaka-cu.ac.jp/publications/>
配下の「大学教育だより&アンロソ」で参照できます。

永村 一雄(えむらかずお)

1957年生まれ

1980年 東京理科大学理工学部建築学科卒業工学博士
現在、生活科学研究科教授
専攻分野/居住環境工学

全学共通教育での担当科目/居住環境と人間